

暮らし

# 興味深人

ワイドWIDE

インタビュー



1961年、京都市生まれ。京都工芸繊維大学卒業後、富士通(神奈川)に就職し、89年、北海道総合通信網への出向をきっかけに札幌へ。2000年7月、NPO法人札幌チャレンジド(当時は市民団体)の活動に参加。会社を退職した06年、同法人事務局長に。08~11年、札幌市の任期付き職員としてNPOの経営者育成や企業の社会貢献活動の支援に従事。翌年、同法人理事長に就任。マラソンが趣味で北海道マラソンの完走が目標。

な おあき  
か のう  
加納 尚明さん

NPO法人札幌チャレンジド理事長

## 就労支援の社会的企業運営

障害者のITスキルを生かした就労支援に取り組むNPO法人札幌チャレンジド(札幌チャレ)。データ入力やホームページ作成など、パソコンを使う仕事を15年以上請け負ってきた。同法人のように、障害者の就労など社会課題の解決を事業の目的とする企業や団体は「社会的企業」とも呼ばれる。経営面から札幌チャレを支えてきた理事長の加納尚明さん(60)に、これまでの歩みや社会的企業への思いを聞いた。

(文・田口友博、写真・伊丹恒)

「札幌チャレが設立された2000年です。きっかけは、神戸の社会福祉法人の取り組みを紹介する『フロップ・ステーションの挑戦』(1998年刊行)という本でした。障害のある人でもパソコンを利用すれば、働いて納税者になれると説いた革新的な一冊です。本を読んで『こんな活動に関わりたい!』と思っていたところ、数日後の道新

の朝刊で、障害者の自立のためにパソコン教室を開く札幌チャレの記事を見つけました。このときは運命を感じましたね」

「パソコンに自信があったんです。『私自身は特段パソコンに詳しいわけではないかもしれませんが、記事では主婦や学生のボランティアが紹介されていました。私が、私はいきなり『組織運営に

—いつ札幌チャレに参加しましたか。  
「札幌チャレが設立された2000年です。きっかけは、神戸の社会福祉法人の取り組みを紹介する『フロップ・ステーションの挑戦』(1998年刊行)という本でした。障害のある人でもパソコンを利用すれば、働いて納税者になれると説いた革新的な一冊です。本を読んで『こんな活動に関わりたい!』と思っていたところ、数日後の道新の朝刊で、障害者の自立のためにパソコン教室を開く札幌チャレの記事を見つけました。このときは運命を感じましたね」

## 依頼多いデータ入力、投稿の監視も

札幌チャレで働くメンバーは、現在35人ほど。うつ病の人や車いすを使う身体障害者、知的障害のある人など、さまざまな背景を持つ。仕事場は一席ずつ仕切りで分けられ、集中してパソコンに向かえる環境だ。

業務内容は多岐にわたる。中でも多くの企業から依頼されるのが、データ入力。ショッピングサイトに掲載される商品や道内の各種イベント情報、航空券予約サイトの航空便情報など、メンバーは資料を見ながら一つ一つ正確に入力する。

大手動画サイトの投稿の監視も、毎日行う重要な業務の一つ。誹謗中傷やわいせつな言葉など、視聴者から報告を受けた不適切なコメントを削除してい

## 適性生かせるようにサポート

また、今年から新たな業務として、人工知能(AI)が正しい判断をするための学習データを作る「アンテーション作業」にも取り組む。動画の中に映る「人」「車」などの対象に対し、それを意味する正しい言葉をタグ付けする作業で、最新技術であるAIの発展にとっても重要だ。仕事は実務を経験しながら覚えるOJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)のやり方を取っている。さらに、IT関連の職業経験がある職員がメンバーたちをサポートし、一対二での対面指導やチーム単位で行うミーティングも行いながら、それぞれの適性を生かせるように努めているという。



札幌チャレンジドでの仕事風景。テレワークで働く人も多い

## 障害者と顧客 満足度高め好循環生み出す

「携わりたい」と札幌チャレにお願いをしました。当時は通信会社で営業を担当しており、人脈や経験を生かせるかと考えたんです。実際、『資料を読み顧客の求めていることを察して提案する』という営業のノウハウを生かして、赤い羽根福祉基金や日本財団などの助成金申請をほぼ通すことができました。札幌チャレが初めて定期的に受注するようになった仕事も、会社員時代に懇意にしていたIT会社から請け負っています」

「社会的企業に関する講演も行っていますね。そもそも、どのような企業のことを指すのでしょうか。」

「株式会社や社団法人、NPOなど組織形態は問いません。札幌チャレのような障害者就労支援の他にも、途上国支援や女性活躍推進などを目的とするものもあり、ソーシャルビジネスとも呼ばれます。ホームレスの人に雑誌販売の仕事を提供するビッグイシュー(日本(大阪市)もその一つです。札幌チャレは社会的企業の例として、高校の教科書に取り上げられたこともあり」

「社会的企業を運営するうえで大切なことはなんですか。『札幌チャレではまず、障害のある人の特性を考慮して仕事に取り組んでもらっています。データ入力も数字の打ち込みをするものもあれば、写真を見て『どんな風景』『荒れた海』といったキーワードをタグ付けするものなどもあり、人によって得手不得手があります。それらを考慮し働きやすい環境をつくることで、働く人の意欲が維持され仕事の質も上がるんです」

「顧客となる企業の満足も得られるのですね。『企業側には社会的企業に仕事を依頼すること自体、社会貢献につながるというメリットがあります。継続して仕事をもらうには質の高さが必要です。札幌チャレの仕事は評判が高く、取引先が口コミで1社、2社、3社と増えていきました。今では道外を中心に毎月10社ほどから仕事を受け、安定収入につながっています。特別なことをやっているのではなく、普通の企業のように顧客満足度と従業員満足度を高めて好循環を生み出しています」

「利益を出すことは目的ではないのですか。『黒字自体は目的ではありませんが、社会課題の解決に取り組む、その活動を維持するためにも収益の確保が大切です。札幌チャレ設立から現在までの累積収支は、プラス1180万円。利用者に支払う年間の就労支援賃金の総額も、集計を始めた2007年から3倍の約3千万円にまで増えました。江戸時代に活躍した近江商人には、売り手良し、買い手良し、世間良しを重視する『三方良し』という心得がありました。社会課題を解決しながら、顧客に満足してもらい、自分たちが事業を続けるための収入を得る。昔からある考え方ですが、社会的企業にとってもとても大切です」

「今後やりたいことを教えてください。『自分自身のことではなく『福祉の人』ではなく『ビジネスの人』と考えています。世の中には、社会課題に取り組む素晴らしい団体が数多くある。札幌チャレに留まらず、社会的企業の経営者としてのノウハウを生かし、そうした団体の活動を支援したいと考えています」

## 取材後記

障害福祉担当の記者として多くの福祉関係者に話を聞いてきたが、経営者として札幌チャレを支える加納さんは、これまで取材してきた誰とも異なっていた。「顧客満足度」「従業員満足度」といった用語を使い、札幌チャレの收支計画について語る姿は、まさに「ビジネスの人」だった。

加納さんのモットーは「自分が楽しく、皆も楽しく、社会のためになること」をして飯を食う「だそう。札幌チャレの話をする加納さんは常に笑っていて、とても楽しそうだった。よりよい社会をつくるために一番大切なのは、楽しむことかもしれない。